

杜牧の「李戡墓誌銘」について（下）※

愛 甲 弘 志

一

開成二年（八三七）頃に作られた杜牧の「李戡墓誌銘」について、上篇では先ず墓誌銘全文を補足を加えながら読み解き、それから歴代の評論を引用してこの墓誌銘が文学史的に持つ意義を紹介し、最後にこれが作られるまでの杜牧自身の経歴と大まかな時代背景について再確認することによって、この「墓誌銘」で展開される〈元白詩〉批判の文学論が時の政治と密接な関係を有するのではという見通しを立てて稿を閉じた。そこで本篇ではこの時代の文学の有り様を更によく理解するために、先ず皇帝を頂点とする権力者たちの政治と文学について明らかにした上で、それから元稹と白居易の当時の政界、及び文壇に於ける位置づけを行うことによって、杜牧の「李戡墓誌銘」の持つ意義について新しい視点を提供したい。そこで先ず穆宗期まで遡って見てみることにする。

○穆宗期 元和十五年（八二〇）至長慶元年（八二一）

穆宗の在位は短かったが、この皇帝と文学との関わりを記す記事は、特に元稹（七七九―八三一）とのからみで

興味深いものがいくつもある。『旧唐書』『元稹伝』には次のように記す^{〔1〕}。

穆宗皇帝 東宮に在りしとき、妃嬪左右 嘗て稹の歌詩を誦して以て楽曲を為す者有れば、稹の爲る所を知り、嘗て其の善きことを称え、宮中呼びて元才子と爲す。

荆南監軍 崔潭峻 甚だしく稹を礼接し、掾吏を以て之を遇せず（属官扱いなどではなかった）。常に其の詩什を徵めて、之を諷誦す。長慶の初、潭峻 朝に帰り、稹の「連昌宮辭」（元和十三年 八一三）等百余篇を出し奏御するに、穆宗大い悦びて問うらく、「稹安くにか在る」と。對えて曰く、「今 南宮の散郎（尚書省膳部員外郎）たり」と。即日、祠部郎中・知制誥に転ず。朝廷 書命の相府に由らざるを以て（任命書が宰相を経由しなかつたので）、甚だ之を鄙しむ。然れども辞誥の出だす所 夔然と古と侔と爲し（遠く古のものに比肩する）、遂に盛んに代に伝わる。是れに由りて極めて恩顧を承く。

嘗て「長慶宮辭」数十百篇を爲り、京師競いて相い伝唱す。居ること何くも無くして、召されて翰林に入り中書舍人・承旨学士と爲る。中人 潭峻の故（宦官らは元稹が崔潭峻と関係があるということ）を以て争いて稹と交わり、知枢密 魏弘簡 尤も稹と相い善く、穆宗 愈よ深く知重せり。

河東節度使 裴度三たび上疏して稹は弘簡と刎頸の交わりを爲し、謀りて朝政を乱すを言い、言甚だ激訐なり。穆宗 中外の人情を顧みて、乃ち稹の内職（翰林承旨学士）を罷め、工部侍郎を授くるも（長慶元年十月八二二）、上の恩顧未だ衰えず。

穆宗皇帝在東宮、有妃嬪左右嘗誦稹歌詩以爲樂曲者、知稹所爲、嘗稱其善、宮中呼爲元才子。

荆南監軍崔潭峻甚禮接稹、不以掾吏遇之。常徵其詩什、諷誦之。長慶初、潭峻歸朝、出稹「連昌宮辭」等百餘篇奏御、穆宗大悅問、「稹安在」。對曰、「今爲南宮散郎」。即日、轉祠部郎中・知制誥。朝廷以書命不由

相府、甚鄙之。然辭誥所出覓然與古爲侔、遂盛傳於代。由是極承恩顧。

嘗爲「長慶宮辭」數十百篇、京師競相傳唱。居無何、召入翰林爲中書舍人・承旨學士。中人以潭峻之故爭與禎交、而知樞密。魏弘簡尤與禎相善、穆宗愈深知重。

河東節度使裴度三上疏言禎與弘簡爲刎頸之交、謀亂朝政、言甚激訐。穆宗顧中外人情、乃罷禎內職、授工部侍郎、上恩顧未衰。

（『舊唐書』卷一六六「元稹傳」）

これは元稹が辛酸を嘗めた外地から戻って、いよいよ中央朝廷で日の目を見る時のことを記したものであるが、そのきっかけをここでは宦官、崔潭峻を介しての、そして穆宗も皇太子の頃に愛好していた元稹の詩の献上にあったとする。これより元稹は知制誥・中書舍人・翰林承旨字士というふうに政治の中枢へと分け入っていくのである。しかし元稹の手に成る制誥・制誥が古のものに匹敵するほどすぐれたものだったが、職責の性格、或いはその処世術から、彼は必ずしも好感をもつて周囲に迎えられたわけではなかったことも注意しておく必要がある^④。

同じく長慶元年（八二二）、元稹は雜詩十卷を穆宗に進献している。その「詩を進むる状（進詩狀）」（『元氏長慶集』卷三五）に拠ると、この時に献じたものは〈古風詩〉〈古今樂府〉〈律詩百韻〉〈兩韻七言〉など様々あった。しかし元和十年（八一五）に「詩に叙して樂天に寄する書（敘詩寄樂天書）」（『元氏長慶集』卷三十）で〈古風詩〉〈樂府〉〈律詩〉〈新題樂府〉〈古體〉〈七言・五言律詩〉〈悼亡詩〉〈豔詩〉に分類された中の〈悼亡詩〉〈豔詩〉は抜かれていたことは既に指摘されているが、ここでも改めて確認しておく^⑤。そもそも詩を進献するのは権力者のステータスシンボルの意味合いもあり、近くは元和八年（八一三）に權徳輿（七五九―八一八）らも詔によって憲宗に詩を進献している^⑥。因みに元稹は元和十四年（八一九）にも時の有力者であった令狐楚の求めに応じて、〈古

體歌詩一百首・百韻至兩韻律詩一百首、合爲五卷」(「上令狐相公詩啓」)を献上しているが、既に高位に在った権徳興らの進献とはかなり意味合いが異なり、元稹のそれは詩人としての名声を背景に、政界に於ける地固めに対して大いに寄与したように見える。

○文宗期 寶曆三年(八二六)至開成五年(八四〇)

穆宗の後の敬宗もわずか三年の在位で、その後を継いだのが文宗である。嘗て穆宗に寵愛された元稹が五三歳で武昌軍節度使の任所、鄂州で亡くなったのも、この文宗の大和五年(八三一)のことである。そして既に上篇でも述べたように、この皇帝の在位中に甘露の変(大和九年八三五)が起り、李戡が亡くなったのが開成二年(八三七)杜牧三五歳春のことで、その後「李戡墓誌銘」が作られているのである。

この文宗も文学と深い関わりを持つ。『旧唐書』『馮定伝』には次のような記載がある。

大和九年(八三五)八月、太常少卿と爲る。文宗、毎に楽を聴き、鄭衛の声を鄙しむ。奉常(礼楽を司る)に詔して開元中の「霓裳羽衣舞」を習わせ、「雲韶楽」を以て之に和せしめ、舞曲成るに、定楽工を総べて庭に閱し、定其の間に立つ。文宗其の端凝植うるが若き(莊重なさま)を以て、其の姓氏を問う。翰林学士李珣(七八四?―八五二?)對えて曰く、「此れ馮定なり」と。文宗喜び問いて曰く、「豈に能く古の章句を爲る者に非ざらんか」と。乃ち召して階を昇らしめ、文宗自ら定の「客を西江に送る詩」(逸詩)を吟じ、吟罷りて、益す喜ぶ。因りて禁中の瑞錦を錫り、仍お大いに著す所の古体詩を録し以て獻ぜしむ。

大和九年八月、爲太常少卿。文宗、每聽樂、鄙鄭衛聲。詔奉常習開元中「霓裳羽衣舞」、以「雲韶楽」和之、舞曲成、定總樂工關於庭、定立於其間。文宗以其端凝若植、問其姓氏。翰林學士李珣對曰、「此馮定也」。文

宗喜問曰、「豈非能爲古章句者耶」。乃召昇階、文宗自吟定「送客西江詩」、吟罷、益喜。因錫禁中瑞錦、仍令大錄所著古體詩以獻。

（『舊唐書』卷一六八「馮宿傳附馮定傳」）

文宗が乱世を象徵する〈鄭衛の声〉を嫌い、黃帝の「雲門」や、虞・舜の「大韶」に因むといわれる太平の音楽、「雲韶樂」を好んでいたことは、当然、古詩を善くした馮定への絶大なる評価にも通ずる。この文宗の詩歌愛好癖は、『資治通鑑』にも次のように載せている。

十一月（開成三年八三八）……上詩を好みて、嘗て詩學士を置かんと欲す。李珣曰く、「今の詩人は浮薄にして、理に益無し」と。乃ち止む。

十一月……上好詩、嘗欲置詩學士。李珣曰、「今之詩人浮薄、無益于理」。乃止。

（『資治通鑑』卷二四六「唐紀六二」）

このような文宗の度を越えた詩歌愛好に対して、詩人というのは輕薄なもので治政に益するものは何もないと、詩學士を置くことを押し止めたのは、これもまた前掲の、古詩を善くした馮定を紹介した李珣である。この話は、北宋、王讜『唐語林』では楊嗣復（七八三—八四八）の反対も加わるなど、より具体的になっている。

文宗、五言詩を好み、品格は肅・代・憲宗と同じくして、古調尤も清峻たり。嘗て詩學士七十二員を置かんと欲し、學士の中に薦人の姓名者有り（原註、當時の詩人李廓名を馳せ、涇原從事たり）、宰相楊嗣復曰く、「今の詩を能くするは、賓客分司劉禹錫（七七二—八四二）に若くは無し」と。上言無し。

李珣奏して曰く、「当今詩學士を起置せしむるは、名稍や嘉からず。況んや詩人窮薄の士多く、識理に昧し。今翰林學士皆文詞有り。陛下得るに古今の作者を覽るを以てすれば、其の間に怡悅すべし。疑有れば、學士に顧問すれば可なり。陛下昔者王起・許康佐に命じて侍講と爲し、天下謂えらく陛下は古を好みて儒

を宗とし、敦く朴厚を揚ぐと。臣聞く憲宗は詩を為りて、格は前古に合う。當時の輕薄の徒、章を擒え句を繪き（美辭麗句）、聲牙崛奇たりて（こつこつとした措辭）、時事を譏諷し、爾る後名声を鼓扇し、之を元和体と謂えり。実に聖意の好尚は此くの如きものに非ず。今陛下更に詩學士を置けば、臣深く慮るに輕薄小人、競いて嘲詠の詞を為り、意を雲山草木に属れば、亦た之を開成体と謂わざらんかと。皇化を玷黷すれば（皇帝の教化に傷をつける）、実に小事に非ず」と。

文宗好五言詩、品格與肅・代・憲宗同、而古調尤清峻。嘗欲置詩學士七十二員、學士中有薦人姓名者（原註、當時詩人馳名、爲涇原從事）、宰相楊嗣復曰、「今之能詩、無若賓客分司劉禹錫」。上無言。

李珣奏曰、「當今起置詩學士、名稍不嘉。況詩人多窮薄之士、昧於識理。今翰林學士皆有文詞。陛下得以覽古今作者、可怡悅其間。有疑、顧問學士可也。陛下昔者命王起・許康佐爲侍講、天下謂陛下好古宗儒、敦揚朴厚。臣聞憲宗爲詩、格合前古。當時輕薄之徒、擒章繪句、聲牙崛奇、譏諷時事、爾後鼓扇名聲、謂之元和體。實非聖意好尚如此。今陛下更置詩學士、臣深慮輕薄小人、競爲嘲詠之詞、屬意於雲山草木、亦不謂之開成體乎。玷黷皇化、實非小事」。

（『唐語林』卷二「文學」）

この『唐語林』で盛られた話がいつたい何れの書に基づくのか明らかにし得ず、扱いには慎重を期せねばならない。しかしながらこの話も前掲の『舊唐書』や『資治通鑑』と同様に政治と文學を巡る問題が語られていることには変わりがない。例えば、今や洛陽で太子賓客という閑職に置かれている劉禹錫を楊嗣復が名指しして、へ今の詩を能くするは、賓客分司劉禹錫に若くは無し（今之能詩、無若賓客分司劉禹錫）というこの一言で文宗が詩學士を置くのを止めたことについて、明、胡應麟『詩藪』（外編）卷三が「文宗楊の奏するに答えざるは、當に劉（禹錫）の（主）叔文に党わるを以ての故なるか（文宗不答楊奏、當以劉黨叔文故耶）」と解するのを周勛初

『唐語林校證』は援用するが、それは劉禹錫や柳宗元といった文人官僚たちが行った永貞の改革（八〇五）の反動で引き起こされた政治的大混乱を警戒してということになる。⁽⁹⁾ もっともここで押さえておきたいのは、この出来事が開成三年（八三八）のことであり、それが李戡が亡くなって（開成二年 八三七）、杜牧の「李戡墓誌銘」が作られたのとはほ期を一にしているということである。つまりこれだけでも杜牧の文学が政治と深く関わっていた、いや関わらざるを得なかったということが推察されるであろう。

文宗朝での政治と文学に纏わる話は、他にも幾つか残されている。これより前の開成元年（八三六）の出来事として、『資治通鑑』には次のように記す。

（開成元年……夏四月）戊戌、上宰相と従容として詩の工拙を論ず。鄭覃曰く、「詩の工なる者、三百篇に若くは無し。皆國人之を作りて以て時政を刺美す。王者は之を采りて以て風俗を見るのみにして、聞かず王者の詩を為るを。後代 辭人の詩は華にして実あらず、事を補う無し。陳後主・隋煬帝皆詩に工にして、國を亡ぼすを免れず。陛下何ぞ焉を取らんや」と（史に言う、鄭覃、能く經學を守り、以て其の君を輔くと）。覃經術に篤く、上甚だ之を重んず。

（開成元年……夏四月）戊戌、上與宰相從容論詩之工拙。鄭覃曰、「詩之工者、無若三百篇。皆國人作之以刺美時政。王者采之以觀風俗耳、不聞王者爲詩也。後代辭人之詩華而不實、無補於事。陳後主・隋煬帝皆工於詩、不免亡國。陛下何取焉」（史言鄭覃、能守經學、以輔其君）。覃篤於經術、上甚重之。

（『資治通鑑』卷二四五「唐紀六一」）

このように最高権力者たる皇帝に対して詩歌の本来あるべき姿を再認識するようにと進言する鄭覃について、彼が宰相、鄭珣瑜の子で、その門蔭（父祖の功績で官職を授けられること）に拠って任官したと『旧唐書』の伝に載

せるが、更に次のようにも記している。

覃 經義に精しと雖も、文を爲ること能わずして、進士の浮華なるを嫉む。開成の初（八三六）、宜しく礼部貢院の進士科を罷むべきを奏す。初め、紫宸にて対うるに、上語は士を選ぶに及べば、覃曰く、「南北朝は多く文華を用いて、所以に治まらず。士は才の堪うるを以て即ち用うれば、何ぞ文辭を必ずせんや」と。

帝曰く、「進士及第の人にして已に曾て州県の官と爲る者、方鎮（節度使など）奏署すれば（上奏して自分の属官に任ずる）即ち之を可とし、余りは即ち否とす」と。覃曰く、「此の科率多輕薄なれば、必ずしも尽く用いるべからず」と。帝曰く、「輕薄・敦厚、色色之れ有り、未だ必ずしも独り進士に在らず。此の科置かれて已に二百年、亦た遽かに改むべからず」と。覃曰く、「亦た過ぎて崇樹すること有るべからず（度を過ぎた任用をなさいませんように）」と。

覃雖精經義、不能爲文、嫉進士浮華。開成初、奏禮部貢院宜罷進士科。初、紫宸對、上語及選士、覃曰、「南北朝多用文華、所以不治。士以才堪即用、何必文辭」。帝曰、「進士及第人已曾爲州縣官者、方鎮奏署即可之、餘即否」。覃曰、「此科率多輕薄、不必盡用」。帝曰、「輕薄・敦厚、色色有之、未必獨在進士。此科置已二百年、亦不可遽改」。覃曰、「亦不可過有崇樹」。

（『舊唐書』卷一七三「鄭覃傳」）

輕佻浮薄の権化とみなされた進士科の廃止を鄭覃が進言したその心中には、經書には通ずるも詩文を善くしないという鄭覃の個人的な妬みもあつたようだが、¹⁰しかしこのように考えるのは鄭覃ひとりではなかった。これに遡ること更に三年前の大和七年（八三三）八月、進士科の試験では經学や論を重視して詩賦は取り止めとする令が出されている。¹¹

漢代は人を用いるに、皆儒術に由る。故に能く風俗深厚にして、教化興り行わる。近日、苟に浮華を尚び、

經芸を修むること莫し。先聖の道理、堙鬱（埋もれたさま）として伝わらず。況んや進士の科、尤も釐革（改革）を要す……其れ進士の挙は宜しく先に帖經（經書の穴埋め）を試み、并せて大義を略問し、經義の精通する者を取りて、次に議論各の一首を試みて、文理高き者に便ち及第を与うべし。其の試みられし所の詩賦は並て停む。

漢代用人、皆由儒術。故能風俗深厚、教化興行。近日苟尚浮華、莫修經藝、先聖之道理、堙鬱不傳。況進士之科、尤要釐革……其進士舉宜先試帖經、并略問大義、取經義精通者、次試議論各一首、文理高者便與及第。其所試詩賦並停。

（『文苑英華』卷四三一「敕書十三」・「大和七年八月七日册皇太子德音」）

ここでも輕佻浮薄な風がもてはやされ、經書がなおざりにされていることが問題視されている。更に『資治通鑑』にはその前月の事として次のような記載がある。

（大和）七年（八三三）……秋七月壬寅……上近世の文士の經術に通ぜざるを患うるに、李德裕楊綰の議に依りて、進士は論議を試み、詩賦を試みざることを請う。

（大和）七年……秋七月壬寅……上患近世文士不通經術、李德裕請依楊綰議、進士試論議、不試詩賦。

（『資治通鑑』卷二四四「唐紀六〇」）

代宗の寶應二年六月（七六三）の楊綰の建議を抛り所に、進士科では〈論議〉を試みて〈詩賦〉は廃止することを請うたのが李德裕（七八七―八五〇）であった。李德裕は宰相、李吉甫（七五八―八一四）の子で、元和三年（八〇八）に牛僧孺や李宗閔らが進士の試験で、時の権力者であった李吉甫を痛烈に批判したことに端を発する、いわゆる牛李の党争の、李吉甫亡き後の一方の領袖で、貢挙を経て官職を得ることの多かった牛党が挙子党とも言われるのに対して、李德裕や鄭覃のように門蔭に由ることの多かった李党は任子党とも呼ばれた。その李德裕

や鄭覃という時の権力者がこのように進士科で詩賦を課することを止めることを建議したことは受験界のみならず、当時の政界にも大きな影響を与えたことは想像に難くない。しかし翌大和八年（八三四）十月には、大和六年以前（八三〇）の政界にも大きな影響を与えたことは想像に難くない。しかし翌大和八年（八三四）十月には、大和六年以前のやり方を基本的に復活するとの礼部の奏請（『冊府元龜』卷六四「貢舉部」「條制」）があつて詩賦は復活したが、これは同じ月に李德裕が中書侍郎・同平章事から山南西道節度使として出されたことと関連しているかもしれない。これよりかなり降つて、會昌六年（八四六）、杭州刺史であつた杜牧（四四歳）は宣歙觀察使、高元裕に献じた「宣州的高大夫に上る書（上宣州高大夫書）」（『樊川文集』卷十二）で、去歲より前五年、執事者 上言して云うに、「科第の選、宜しく寒士に与うべく、凡そ子弟たるは、議して進むべからず」と（自去歲前五年、執事者上言云、「科第之選、宜與寒士、凡爲子弟、議不可進」）というのを引き合ひに、時の権力者たちが「科第之徒浮華輕薄」（同前）と見ていたことに徹底的に反駁する。これについて吳在慶氏は『杜牧集繫年校注』¹⁴で、郭文鎬氏の論文「杜牧若干詩文繫年之再考辨」¹⁵を引用して、去歲前五年とは開成五年（八四〇）のことで、時の宰相、李德裕が武宗に治政の心得を進言して、貢舉での度を過ぎた子弟たちの弊害を糺し、家柄のない者たちを採用すべきことを主張したのであるが、史書には記録がないということを紹介している。この「宣州の高大夫に上る書（上宣州高大夫書）」で杜牧が歴代の名臣をあげつらつて、彼らが名門の子弟であり、進士出身であつたと反駁するのはかなり説得力がある。そこには杜牧自身が名門、京兆杜氏の子弟であり、且つ進士科出身であつたことが多分に働いていようが、しかし「科第之徒浮華輕薄」の原因にひとつと見なされた詩歌創作に熱中して経書はなおざりという問題には触れられてはいない。

鄭覃や李德裕といった権力者たちが詩歌といった文学に対して厳しい姿勢を取るのには、やはり為政者としての立場の然らしめるところであつたといえよう。この時、その為政者の頂点に君臨していた文宗も単なる詩歌愛好

者だった徳宗のようではいらなかった。それは文宗が馮定を古詩の名手と讃えたのと同じ年の開成元年（八三六）の別の出来事からも知られる。

文宗開成元年二月癸未、宰臣紫宸殿に奏事す。帝曰く、「從來の文格は佳に非ず。昨に進士に試みし題目は是れ朕の自ら出す所にして、詩賦を見るに去年に勝るに似たり」と。宰臣李石曰く、「陛下は詩賦の格調を改め、以て頽俗を正せり。高鏐も亦た能く精を厲^{ふる}せて（発奮して）士を取り、仰ぎて聖旨に副^そはしめんとす」と。帝曰く、「四方の表奏の典実ならずして浮巧を尚ぶ者は、宜しく掌書記を罰すべし」と。石曰く、「古人は事に因りて文を爲るに、今人は文を以て事を害す。弊を懲らして末を抑うるは、実に盛時に在ればなり」と。帝曰く、「但だ古に効^{なま}いて文を爲れば、自然と体は高遠を尚ばん」と。時に又た詔して、兵部尚書王起に『文場秀句』一卷を進めしむ。……十一月、又た詔して、兵部尚書王起到國朝已來の詩を能くする人の名字を進めしむ。

文宗開成元年二月癸未、宰臣奏事于紫宸殿。帝曰、「從來文格非佳。昨試進士題目是朕自出所、見詩賦似勝去年」。宰臣李石曰、「陛下改詩賦格調、以正頽俗。高鏐亦能厲精取士、仰副聖旨」。帝曰、「四方表奏不典實而尚浮巧者、宜罰掌書記」。石曰、「古人因事爲文、今人以文害事。懲弊抑末、實在盛時」。帝曰、「但效古爲文、自然體尚高遠」。時又詔、兵部尚書王起進『文場秀句』一卷。……十一月又詔、兵部尚書王起進國朝已來能詩人名字。

（『冊府元龜』卷四〇「帝王部」「文學」¹⁶）

これに拠れば、この年の詩賦の問題は文宗自らが出しており、よって格調改まって退廃的な風俗を正したと臣下に讃えられている。その翌年（開成二年八三七）の貢挙について、唐、范攄『雲谿友議』には、文宗から出題された賦が「常規（通常の規格）」に拠る「琴瑟合奏賦」、詩は「齊梁体格」に拠る「霓裳羽衣曲詩」であったと

記されている。

文宗元年（開成元年 八三六）秋、詔して礼部高侍郎（高）鎔に復び貢籍を司らしめて曰く、「夫れ宗子維城（皇族）、本文百代にして、封爵便宜して、廃絶せしむること無し。常年 宗正寺の解送人、浮薄有りて、以て科名を忝けがさんことを恐る。卿に在りては芸能を精練して、賢路を妨ぐることを勿かれ。其の試みる所の賦は則ち常規に准より、詩は則ち齊梁体格に依るべし」と。乃ち「琴瑟合奏賦」・「霓裳羽衣曲詩」を試みる。

文宗元年秋、詔禮部高侍郎鎔復司貢籍曰、「夫宗子維城、本文百代、封爵便宜、無令廢絶。常年 宗正寺解送人（皇族に關する役所から推薦された受験者）、恐有浮薄、以忝科名。在卿精練藝能、勿妨賢路。其所試賦則准常規、詩則依齊梁體格」。乃試「琴瑟合奏賦」・「霓裳羽衣曲詩」。（唐、范攄『雲谿友議』卷上「古製興」）

賦が〈常規〉で作り、詩は〈齊梁体格〉に拠るということは、〈齊梁体格〉が〈常規〉でないことになる。杜曉勤氏は「唐開成試詩變體與文宗朝黨爭之關係」と題する論文で、文宗のいう〈齊梁体格〉とは、齊・梁時の詩歌の題材・意境・風格とは無關係で、主に詩歌の体裁や格律を指しているのであり、句・聯・篇に於いて故意に近体詩の詩律を犯し、声病を避けないという特徴を持つという。つまり漢魏晉宋の五言古詩に比べれば、声律と對偶を凝らす齊梁体は一種の新体ではあるが、盛唐以後流行した近体の律詩に比べれば古体になり、文宗は詩歌の形式に対して復古的改革を試みたのだと論じている。そうするとこれまでの文宗に纏わる記事の中で、〈古〉ということばが散見されたもののような脈絡で解するとより理解しやすい。そしてまた前述のように文宗が開成元年（八三六）、及び同二年（八三七）に自ら詩賦について出題して、〈詩賦格調、以正頽俗〉と臣下から評されたことや、兵部尚書、王起に本朝の詩人をリストアップさせたことなども併せて、李戡が本朝の〈古詩〉に類するものを集めた『唐詩』を作ろうとしたこと、さらにはそれを杜牧の「李戡墓誌銘」で紹介したこと、内容

的に、また時間的にも重ねてみる事が十分に可能であろう。

二一

『唐詩』と銘打って唐朝以来の〈古詩〉に類するものを集めようとした李戡に共感した杜牧が、彼の墓誌銘の中でそれを紹介したことに、杜牧自身が置かれていた時代的、政治的環境に於ける文学の立ち位置というものがあった、それがこれまで縷々説明してきた皇帝を頂点とする権力者たちの政治と文学とパラレルな関係にあったことを一応の結論として明らかにしてきたつもりである。これは同時に「李戡墓誌銘」の〈纖艷不逞〉なる〈元白詩〉への批判ともダイレクトに結びつくのであるが、これほどまでに杜牧が〈元白詩〉を批判し得たのは、大和五年（八三二）に〈元白詩〉の当事者の一人である元稹が亡くなっていることが大きく関係しているということは見落としてはならないだろう。そもそも〈元白詩〉なるものは元和期に盛んに作られ大いにもてはやされていたが、しかし〈元白詩〉がその効力を発揮したのは、元和が終わろうとする元和十四年（八一九）に元稹が長安に戻って、長慶に改元されて帝位についた穆宗から寵愛を受けたあたりだと言える。前述の如く、元稹が穆宗や令狐楚に詩を献上したのもこの頃である。しかしその元稹も政治的に枢要な地位に就くには為政者としての立場を明確にせねばならなかった。彼が文宗に献じた詩には艷詩が含まれていなかったし、また張祜（七九二—八五三？）の推薦を巡って、『唐摭言』には次のような話も載せる。⁽¹⁸⁾

（張）祜 京師に至り、方に元江夏（元稹）の内庭に偃仰せる（恣に振る舞う）に属^あたる。上因りて召して祜の詞藻の上下を問う。頽^{たふ}対えて曰く、「張祜は雕蟲小巧にして、壯夫は恥ぢて為らざる者なり。或いは之を奨^あ激せば、陛下の風教を変ぜんことを恐る」と。上之に頷く。

祐至京師、方屬元江夏偃仰内庭。上因召問祐之詞藻上下。楨對曰、「張祐雕蟲小巧、壯夫恥而不爲者。或獎激之、恐變陛下風教」。上領之。

〔唐摭言〕卷十一「薦舉不捷」

ここで元楨が張祐を批判するのは、杜牧が「李戡墓誌銘」で〈元白詩〉を批判するのとまったく同じ口吻である。これも権力者としての元楨の立場の然らしめるところといえるが、逆に権力志向の強かった元楨に対する批判はなかなかできなかったに違いない。その元楨とは対照的に、〈元白詩〉のもう一人の当事者である白居易は、元和十五年（八二〇）に主客郎中・知制誥、そして翌年には中書舍人になったまでは元楨とほぼ同じ軌跡を描くが、その後は、杭州刺史・蘇州刺史の外官、また中央に戻って秘書監、そして刑部侍郎を最後に、大和三年（八二九）には太子賓客として洛陽に引きこもり、劉禹錫らと唱和の日々を送って政界の表舞台に出て来なかった。つまり開成二年（八三七）、李戡が亡くなった時には元楨が亡くなってすでに六年、白居易はまだ存命中だったものの、もはや政治的野心は消え失せていた時で、白居易に対する気遣いは必要としなかったといえる。前述のように文宗が詩学士を置くことに反対した李珣の諫言はこの翌年（八三八）のことで（『資治通鑑』巻二四六「唐紀六二・『唐語林』巻二「文學」、そこにも元白をも意識した〈元和体〉への痛切な批判があった。

因みに白居易にはまたこの張祐と関連した逸話が幾つか残されている。唐・范攄『雲谿友議』（巻中「錢塘論」）には、長慶三年（八二三）、白居易が杭州刺史に赴任したばかりの頃、張祐と徐凝が州試の解元を争って、白居易は徐凝に軍配を上げたという話が載せられているが、同じく『雲谿友議』には次のような話を載せている。

錢塘の酒徒 朱冲和、小舟にて經過するに、祐語らしめて曰く、「張祐前に進士と称せば、亦た難からずや」と。冲和乃ち自ら名を啓し、詩を贈りて之を嘲る。祐平生傲誕にして、公侯に至りしも、未だ斯くの如きの挫きあらざるなり。詩に曰く、「白は東都に在りて元は已に薨ぜり、蘭台臺・鳳閣（元楨と白居易が任

ぜられたことのある祕書省校書郎や中書舍人）人の登ること少なし。冬瓜堰（浙江省嘉興市あたり）下に張祐に逢えば、牛屎堆辺に我が能を説く（牛馬の糞尿だらけのところでは自身の才能を自慢しているとは）」と。

錢塘酒徒朱冲和、小舟經過、祐令語曰、「張祐前稱進士、不亦難乎」。冲和乃自啓名、而贈詩嘲之。祐平生傲誕、至於公侯、未如斯之挫也。詩曰、「白、在東都元已薨、蘭臺鳳閣少人登。冬瓜堰下逢張祐、牛屎堆邊說我能」。

（『雲谿友議』 卷下「雜嘲戲」）

これは朱冲和なる男が尾羽打ち枯らしてもなお傲慢な張祐をやり込めた話である。贈り主相手に〈張祐〉などと記してあれば、この話自体の信憑性がますます疑われるが、この詩に白居易と元稹が引かれるのは、前述の如く、張祐が嘗てこの二人に行く手を阻まれたことを露骨に皮肉つてみるとみてよからう。⁽²⁰⁾ この話も「李戡墓誌銘」と同様に元稹は亡くなっているが白居易はなお存命中という設定に、ある意味、生々しさが感じられる。

三

これまで「李戡墓誌銘」が作られるまでの時代状況、特に皇帝を頂点とした権力者たちの政治と文学、さらには〈元白詩〉について時間軸に沿って眺めていくことによつて、この墓誌銘の持つ意味、そして杜牧自身に於ける政治と文学との関係を解き明かしてきたつもりである。つまりこれまで述べてきたことから明らかにしたことは、この頃、元和体や貢挙の〈浮華〉なるものへの批判と〈古〉なるものへの回帰が皇帝を頂点とする権力者たちの志向する政治的風潮となっていたことが、杜牧をして〈元白詩〉への批判へと向かわせた。しかもそれは大和五年（八三一）の元稹の死がこのような痛烈な批判を可能にしたということであった。

そもそも杜牧の政治と文学について考える場合、些か困難を覚えることがある。杜牧は官途にあつて不遇であ

つたとよくいわれるが、しかし五十歳で中書舍人（正五品上）であつたのは、例えば白居易とまったく同じであり、杜牧は決して不遇だつたとは言えまい。ただ中書舍人になつたその年に亡くなつたことが不運だつただけである。よつて杜牧ほどの官歴を持つならば官界に於いて詩文の贈答も相当数あつても不思議ではないが、残された杜牧の詩文を一覧すると贈答詩や唱和詩が意外にも少なく、その贈り主との関係から杜牧の政治的、或いは文学的立場を知ることが難しい。これを李戡が亡くなつた開成二年（八三七）頃の杜牧の洛陽時代、つまり大和九年（八三五）から開成二年（八三七）までの三年間について見ても同様の疑問がある。この頃の洛陽には白居易はもちろん、劉禹錫や李德裕も開成元年（八三六）に太子賓客として洛陽に入つてゐる。その前年十一月に起こつた甘露の変の影響で洛陽を避難の場所と見なしたのは杜牧だけではなかつたのであろうが、このように重鎮と見なされる者たちが洛陽に居たにも関わらず、杜牧には彼らとの交渉を示す詩文が残っていないのである。これを白居易との関係で言えば、「李戡墓誌銘」に見える杜牧の文学観がすでに諷諭詩を書かなくなつて久しい白居易との没交渉を選択させたともいえるであらう。しかし劉禹錫については、貞元十六年（八〇〇）から二年間、杜牧の祖父、杜佑の掌書記（徐泗濠節度使・淮南節度使）を務めたこともあり、大和八年（八三四）には蘇州刺史から汝州刺史への転任途中に淮南節度使の牛僧孺をその任所である揚州に訪ねていれば、当然、淮南節度推官・監察御史裏行だつた杜牧（三二歳）も面識の機会があつたはずである。また文学の受容からみても、夙に山内春夫氏が「杜牧の『杜秋娘詩』について」と題する論文で、杜牧がこの洛陽に居た時に書いたとされる「杜秋娘詩」（『樊川文集』巻一）が、劉禹錫、及びその「秦娘歌」（『劉賓客文集』巻二七）からの影響のあることを指摘しており、さらには尚永亮氏らも『中唐元和詩歌傳播接受史的文化學考察』に於いて劉禹錫からの影響について詳細に論じている。^②にも拘わらず、同じく洛陽に居た劉禹錫と杜牧との間にその交流を示す詩文が残されていないのは、一

見、不思議なようであるが、そもそも杜牧に贈答詩や唱和詩が少ないこと自体にその疑問を解く鍵が有るように思われる。前述の如く、劉禹錫が洛陽に居た開成三年（八三八）の事として、宰相、楊嗣復が劉禹錫を警戒するかのことを発していることも（『唐語林』巻二「文學」）これと関係するとすれば、杜牧はどこまでも注意深く慎重な人間だったと言えるのではないだろうか。^②

この洛陽時代の杜牧に関してさらに興味深い資料が残されている。それは開成元年（八三六）七月、河南尹であつた李紳（七七二―八四六）が宣武軍節度使として洛陽から任地に赴くに当たって詠んだ詩に付けられた序である。

開成元年六月二十六日、宣武軍節度使を制授さる。七月三日、中使劉泰旌節を押送し洛陽に止まり、五日鎮に赴かんとし、都門を出づれば、城内の少長士女の相送る者数万人。白馬寺に至り、涕泣して車に当たる者止むべからざれば、少尹嚴元容胥吏・市人を鞭うち、其の恋慕せるを怒る。留台御史杜牧、台吏をして百姓を遮り、殴らしめ、其れ祖帳を廃せしむ。

開成元年六月二十六日、制授宣武軍節度使。七月三日、中使劉泰押送旌節止洛陽、五日赴鎮、出都門、城内少長士女相送者數萬人。至白馬寺、涕泣當車者不可止、少尹嚴元容鞭胥吏市人、怒其戀慕。留臺御史杜牧、使臺吏遮毆百姓、令其廢祖帳。

（『追昔遊集』卷下「拜宣武軍節度使」）

李紳の出立に際して別れを惜しむ人々が行く手を阻もうとするので、河南少尹の嚴元容は彼らを鞭打ち、監察御史の杜牧は部下の者を使って民衆を遮り殴りつけさせ、送別用の幕も撤去させる有り様だったという。他所へ転任していく長官が如何に慈愛に満ちた治政を行ったかということとその土地の人々に行く手を阻まれるという話は珍しいことではないが、役目柄、その旅立ちを滞らせまいと立ち働いた者たちのことまでこのように記述す

るのには悪意を感じる。このように記述した李紳について、『旧唐書』『李德裕伝』には次のように記されている。

（李）德裕 元和の時に於いては、之を久しくして調せられず。而るに（李）逢吉・（牛）僧孺・（李）宗閔は私怨を以て恒に之を排擯せり。時に德裕・李紳・元稹と俱に翰林に在りて、学識・才名の相類するを以て、情頗る款密なれば、逢吉の党深く之を惡む。

德裕於元和時、久之不調。而逢吉・僧孺・宗閔以私怨恒排擯之。時德裕與李紳・元稹俱在翰林、以學識才名相類、情頗款密、而逢吉之黨深惡之。

（『舊唐書』卷一七四「李德裕傳」）

また『旧唐書』『李紳伝』（卷一七三）にも「穆宗召して翰林学士と為し、李德裕・元稹と共に禁署に在りて、時に三俊と称され、情意相い善し（穆宗召爲翰林學士、與李德裕・元稹同在禁署、時稱三俊、情意相善）」とあれば、李紳が李党に属していたことが知られる。杜牧は牛僧孺らの恩顧もあつて牛党の一人と見なされるが、甘露の変を避けて洛陽に逃れられたかに見えた杜牧は、依然として政治的重圧に耐え続けねばならなかったのである。この牛李の党争の中にあつて、杜牧は武宗の會昌年間（元年至六年 八四一―八四六）に權勢を振るっていた李德裕に対して、「李司徒相公に上りて用兵を論ずる書（上李司徒相公論用兵書）」（會昌三年 八四三『樊川文集』卷十一）、「李太尉に上りて北辺の事を論ずる啓（上李太尉論北邊事啓）」（會昌四年 八四四 同前卷十六）、「李太尉に上りて江賊を論ずる書（上李太尉論江賊書）」（會昌五年 八四五 同前卷十六）などの対策を献じたことが、『新唐書』『杜佑伝附杜牧伝』（卷一六六）で「牧、剛直にして奇節有り、小謹に齷齪たらず、敢えて大事を論列し、病利を指陳すること尤も切至たり（牧、剛直有奇節、不爲齷齪小謹、敢論列大事、指陳病利尤切至）」と評されるのに通じている。しかしその後、大中三年（八四九）、牛僧孺（七八〇―八四八）の為に作つた「唐故太子少師奇章郡開國公・贈太尉の牛公墓誌銘並びに序（唐故太子少師奇章郡開國公贈太尉牛公墓誌銘并序）」（『樊川文集』卷七）では、その會昌年間を振り返つて

（時に李太尉 柄を専らにすること五年、多く賢士逐いて、天下 恨怨す（時李太尉專柄五年、多逐賢士、天下恨怨）とか、（李太尉必ず公（牛僧孺）を殺さんことを志す（李太尉志必殺公）とまで書き立てている。明らかにこれは李德裕がすでに政争に敗れ、遙か南の地、崖州に流されていたからである。李德裕はその翌年、貶所で没しているが、このようなところからも杜牧が如何に政治に翻弄されていたかを知ることができる。）

以上要するに、本稿では「李戡墓誌銘」を通して、その当時の政治が如何に杜牧の文学に影響を及ぼしてきたかについて縷々述べてきた。そもそも永らく中国の文学を担ってきたのがこのような士大夫たちであれば、彼らの文学についてまったく政治と切り離して考えるのは無理であろう。そういう意味でこの「李戡墓誌銘」がこれまで文学的側面にかなり偏って論じられてきたのに対して政治的な要素も多分に加味して見直そうとしたつもりである。とはいえ、杜牧の作品すべてをこのように政治と結びつけてしまうというのも、これまた同じように批判を受けるに違いないであろう。

註

※本論考は、紙面の都合上、「杜牧の李戡墓誌銘（上）」と

「杜牧の李戡墓誌銘（下）」の二部に分けて論じており、

「杜牧の李戡墓誌銘（上）」については、『人文論叢』（二

〇一五年一月 京都女子大学人文学会）第六三號（第一頁至第十八頁）を参照されたい。

（1）『資治通鑑』巻二四一「唐紀五十七」にはやや簡略に記す。

（2）関連する記事や論考は左記の通り。

・『元氏長慶集』巻四十「制誥序」（長慶元年 八二二）

近世以科試取士文章、司言者苟務剗飾、不根事實。

升之者、美溢於詞、而不知所以美之之謂。黜之者、

罪溢於紙、而不知所以罪之之來。而又拘以屬對、踣

以圓方、類之於賦判者流、先王之約束蓋掃地矣。

・『白氏文集』卷五三「餘思未盡、加爲六韻、重寄微之」

（長慶三年 八二三）

制從長慶辭高古（微之、長慶初知制誥、文格高古始

變俗體、繼者効之也）

詩到元和體變新（衆稱元白爲千字律詩、或號元和格）

・下定雅弘『白氏文集を読む』（一九九六年十月 勉誠社）「前編」第七章 中書制誥―その旧体と新体の分類について― 参照。

(3) 『元氏長慶集』卷五一「翰林承旨學士記」には次のように言う。

大凡大誥令・大廢置・丞相之密畫・内外之密奏、上之所甚注意者、莫不專對。他人無得而參。非自異也、法不當言。……長慶元年（八二一）八月十日記

(4) 『舊唐書』卷一五八「武元衡附儒衡傳」には、武元衡の従弟、武儒衡も本文で引用した「元稹傳」の「朝廷以書命不由相府、甚鄙之」とは別の理由で元稹を蔑んでいたという。

然儒衡守道不回、嫉惡太甚、終不至大任。尋正拜中書舍人。時元稹依倚内官、得知制誥、儒衡深鄙之。會食瓜閣下、蠅集於上、儒衡以扇揮之曰、適從何處來、而遽集於此。同僚失色、儒衡意氣自若。遷禮部郎、長慶四年（八二四）卒、年五十六。

『新唐書』卷一九「白居易傳」の贊も白居易の官途と対照させて次のように述べる。

贊曰……觀居易始以直道奮在天子前、爭安危、冀以立功。雖中被斥、晚益不衰。當宗閔時、權勢震赫、終不附離爲進取計。完節自高。而稹中道微險、得宰相、名

望、灌然。嗚呼、居易其賢哉。

(5) 川合康三「白俗」の検討（一九九四年九月 『白居易研究講座』2所収 勉誠社）参照。後に『終南山の変容』（一九九九年十月 研文出版）に再録。

(6) 『舊唐書』卷十五「憲宗本紀下」に（元和八年）六月壬寅、宰臣武元衡・李吉甫・李絳、舊相鄭餘慶・權德輿、各奉詔令進舊詩」と記され、權德輿には「進詩狀」（『權載之文集』卷四六）がある。

(7) 「上令狐相公詩啓」は、『舊唐書』卷一六六「元稹傳」、及び『冊府元龜』卷八四一「總錄部」「文章第五」に収録するが、『元氏長慶集』には収められていないところに元稹と令狐楚との複雑な関係が窺えるようである。拙稿「令狐楚を通して見る元和の文学」（二〇〇二年十月 創文社『中国読書人の政治と文学』所収）参照。

(8) 李廓については、傅璇琮『唐才子傳校箋』（一九九〇年五月 中華書局）卷第六、第三冊「李廓」（呉企明）・「補正」（一九九五年十一月 中華書局）卷第六、第五冊（陶敏）・周紹良『唐才子傳箋證』（二〇一〇年九月 中華書局）卷第六、中冊「李廓」に詳しいがこの記事には言及していない。また『舊唐書』卷一六九「王涯傳」の（大和三年（八二九）正月、入爲太常卿。文宗以樂府之音、鄭衛太甚、欲聞古樂、命涯詢於舊工、取開元時雅樂、選樂童按之。名曰、「雲韶樂」。樂曲成、

涯與太常丞李廓・少府監庾承憲押樂工獻於梨園亭、帝按之於會昌殿。上悅、賜涯等錦綵」という記事を引用して、この「太常丞李廓」は官位の高さから見て別人だとするが、この『舊唐書』『王涯傳』の大和三年（八二九）の記事内容と前掲の同「馮定傳」の大和九年（八三五）のそれとはかなり似ているところがある。ここではこの二つの資料がともに語る文宗の嗜好を確認することに留めておく。

（9）周勛初『唐語林校證』（一九八七年七月 中華書局）

上冊、第一五〇頁。尚永亮等『中唐元和詩歌傳播接受史的文化學考察』（二〇一〇年十一月 武漢大學出版社。初出は尚永亮・李丹『元和體』原初內涵考論）

二〇〇六年第二期『文學評論』上卷「第二章 元白詩派在中晚唐的傳播與接受」「第二節『元和體』詩傳播接受狀況的考察」は「所謂『摘章繪句』、『聲牙軀奇』、『譏諷時事』的『輕薄之徒』、雖未明指何人、但衡之當日情形、似當以曾作有大量艷詞和諷諭詩的元白等人爲主、兼指曾作有兩首《玄都觀》絕句以譏諷權要的劉禹錫」と解す（第七四頁）。なおこの「元和體」は唐、李肇『唐國史補』（卷下）で「元和以後、爲文章則學奇詭於韓愈、學苦澀於樊宗師。歌行則學流蕩於張籍。詩章則學矯激於孟郊、學淺切於白居易、學淫靡於元稹、俱爲元和體」という批判的な口吻に似る。

（10）経学に造詣が深く詩文を軽んじていた鄭覃について、

『舊唐書』卷十七下「文宗紀下」にも「開成二年（八三七）冬十月……癸卯、宰臣判國子祭酒鄭覃進『石壁九經』一百六十卷。時上好文。鄭覃以經義啓導、稍折文章之士」とある。また『唐語林』卷二「文學」に「文宗皇帝曾製詩以示鄭覃、覃奏曰、且乞留聖慮於萬幾、天下仰望。文宗不悅。覃出復示李宗閔、歎伏不已、一句一拜、受而出之。上笑謂之曰、勿令適來阿父子見之」とは基づくところが不明であるが、詩や詩人に対する、或いは牛李の党争に於ける政治家のひとつの立場を如実に表しているよう。

（11）『冊府元龜』卷九〇「帝王部」「赦宥第九」にも同様の記述有り。

（12）傅璇琮『李德裕年譜』（一九八四年十月 齊魯書社・二〇一三年一月 中華書局）「大和七年」の項参照。なお開成の貢挙と文宗との関係については、杜曉勤「唐開成試詩變體與文宗朝黨争之關係」（『文學遺產』二〇一三年第一期）・仲瑤「開成年間試詩依『齊梁體格』再探討論」（『浙江大學學報（人文社會科學版）』二〇一四年十月）参照。

（13）呉在慶『杜牧集繫年校注』（二〇〇年十月 中華書局）第三冊、「上宣州高大夫書」【注釋】①参照（第八五五頁）。

（14）郭文錫「杜牧若干詩文繫年之再考辨」（『西北師院學報』一九八七年第二期）。

(15)

『舊唐書』卷十八上「武宗本紀」に會昌四年（八四四）十二月のこととして次のような話を載せているが、李德裕は、『文選』さえも「其祖尚浮華、不根藝實」というものの象徴としてやり玉に挙げている。

（會昌四年）十二月、敕、「郊禮日近、獄囚數多、案款已成、多有翻覆。其兩京天下州府見繫囚、已結正及兩度翻案伏款者、並令先事結斷訖申」。時左僕射王起頻年知貢舉、每貢院考試訖、上榜後、更呈宰相取可否。後人數不多、宰相延英論言、「主司試藝、不合取宰相與奪。比來貢舉艱難、放人絕少、恐非弘訪之道」。帝曰、「貢院不會我意。不放子弟、即太過、無論子弟・寒門、但取實藝耳」。李德裕對曰、「鄭肅・封敖有好子弟、不敢應舉」。帝曰、「我比聞楊虞卿兄弟朋比貴勢、妨平人道路。昨楊知至・鄭朴之徒、並令落下、抑其太甚耳」。德裕曰、「臣無名第、不合言進士之非。然臣祖天寶末以仕進無他伎、勉強隨計、一舉登第。自後不於私家置『文選』、蓋惡其祖尚浮華、不根藝實。然朝廷顯官、須是公卿子弟。何者、自小便習學業、自熟朝廷間事、臺閣儀範、班行准則、不教而自成。寒士縱有出人之才、登第之後、始得一班一級、固不能熟習也。則子弟成名、不可輕矣」。

（16）『舊唐書』卷一六八「高鈞傳附高鎔傳」及び唐、高彦休「唐闕史」「李可及戲三教」にも同様の記事を載せる。

(17)

前掲注(12)参照。

(18)

尹占華校注『張祜詩集校注』（二〇〇七年六月 巴蜀書社）「張祜繫年考」は元和十五年（八二〇）に繫年し裴度（八六四―八三九）の推薦としている（第六一九頁）。また令狐楚（七六六―八三七）の「進張祜詩冊表」（『全唐文』卷五三九）は大和五年（八三一）に繫年するが（第六二六頁）、そこには「凡製五言。苞含六義。近多放誕、靡有宗師。前件人久在江湖、早工篇什、研幾甚苦、搜象頗深。輩流所推、風格罕及」とあり、元稹が批判するような「雕蟲小巧」にして「風教變」のようなものは微塵も感じられない。傳璇琮『唐才子傳校箋』（一九九〇年五月 中華書局）卷第六第三冊「張祜」（吳在慶）では、この表は令狐楚が宣歙觀察使であった元和十五年秋のこととする（第一六九頁―第一七三頁）。

(19)

五代、王定保『唐摭言』卷二「爭解元」・唐、皮日休「論白居易薦徐凝屈張祜」（『全唐文』卷七九七）にも白居易が徐凝との郷試での解元争いで徐凝に軍配を上げたことを記す。前掲書(18)『張祜詩集校注』は長慶三年（八二三）のこととするが（第六二三頁）、傳璇琮『唐才子傳校箋』（一九九〇年五月 中華書局）卷第六第五冊「徐凝」（陳尚君）では皮日休「論白居易薦徐凝屈張祜」が『唐詩紀事』に拠るものであり（第二九五頁）、周紹良『唐才子傳箋證』（二〇一〇年

九月 中華書局）卷第六、中冊「徐凝」もそれを偽作として、この話自体が虚構である可能性が大きいとする（第一四四頁）。

- (20) 前掲書(18)『張祜詩集校注』はこの話を會昌二年（八四二）至會昌四年（八四四）に繫年する（第六三三頁）。

- (21) 山内春夫「杜牧の『杜秋娘詩』について」（一九五七年七月 大谷女子大學『大谷女子大國文』第十四號）、後に『杜牧の研究』（一九八五年一月 彙文堂）に再録。

前掲書(9)尚永亮等「中唐元和詩歌傳播接受史的文化學考察」上卷「第三章 柳劉詩歌在中晚唐的傳播與接受」第五節「晚唐名家對劉氏的接受」一、杜牧與劉禹錫」参照（第一四七頁―第一五六頁）。

- (22) 杜牧の甥の裴延翰が書いた「樊川文集序」には次のように記す。

明年冬、遷中書舍人、始少得恙、盡搜文章、閱千百紙、擲焚之、纔屬留者十二三。……雖適僻阻、不遠數千里、必獲寫示。以是在延翰久藏蓄者、甲乙簽目、比校焚外、十多七八。得詩・賦・傳・錄・論・辯・碑・志・序・記・書・啓・表・制、離爲二十編、合爲四百五十首、題曰『樊川文集』。これに拠れば、杜牧は亡くなるその年に自分の詩文を点検して二、三割だけ残して、残りは焼き捨てたが、

裴延翰が更に七、八割を補ったことが知られる。このことについて小川環樹氏は『唐詩概説』（一九五八年九月 岩波書店）第五章「晚唐（八三六―九〇六）」で、杜牧の詩文集について「死の前年に原稿の大部分を自ら焼きすてた結果、死後編せられた『樊川文集』二十巻に収められた艶詩は少数となった」（第八一頁）と述べているが、艶詩を残さないことの意味を考えた時に、艶詩以外についてもその取舍選択は慎重に行われたはずである。そしてそれは裴延翰にもよく理解されていたことは、その序文に政治と文学との関わりについて「嘻、文章與政通、而風俗以文移。在三代之道、以文與忠、啓隨之、是爲理具、與運高下」というように、士大夫、杜牧を顕彰することに終始していることによつて知られよう。